

- 1 かご作りの様子。前後のカゴが分かれています。前後左右バランスよく組み立てることが重要です。
- 2 町内外からたくさんの人が祭りに集まります。町の人口が一年で一番多い日です。日本各地遠くに越していても神輿を担ぎにもどってくる人が多いです。
- 3 牛鬼のかき手も加わって石段を一気にかけ上がり、神輿3体が宮入りします。



「牛鬼」愛媛県の南部には祭りに牛鬼はよく見られますが、ここ狩浜地区の牛鬼は動きが激しいことで有名です。中でも「切り回し」が見どころの一つ。重さ約 300 kg にもなる牛鬼があばれまわる姿は圧巻です。

牛鬼の準備だけではなく

祭り前の活動は、牛鬼の準備だけでなく、子どもたちが参加する「大神楽」や「角力練り」の指導も担っています。10月に入ると、毎晩19時から小学生たちが集まり、約1時間の練習を行います。練習が終わった後が牛鬼組の大人たちの時間。牛鬼の頭（面）や尻剣の修繕などを進めています。

続けていると、かつて練りを教えていた子供たちが、牛鬼のかき手として加わるようになります。最近では3人の若手が仲間に加わり、生産者の藤本開紀（はるき）もその1人。私が牛鬼をかき始めた頃は小学校6年生。今では頼もしい仲間です。また、私自身も、かつて練りを教えてくださった先輩たちと一緒に牛鬼をかいていた時期もありました。こうした世代を超えたつながりこそが、祭の力だと感じます。

「祭」当日を迎えて

長い準備期間を経て、いよいよ祭り当日を迎えます。早朝5時。掛け声と貝（笛）の音が響き渡り、牛鬼組が出発します。緊張と高揚が入り混じった独特な雰囲気包まれ、長い1日が始まります。集落では1年で最も活気づく一日でもあります。各御旅所で暴れる牛鬼に悲鳴を上げながら逃げ惑う人の姿、子どもたちの練りを見守りながら微笑むお年寄りの姿。地域内外から多くの人が訪れ、狩浜全体が熱気と笑顔に包まれます。

牛鬼組の活動から

見る祭りの今



春日神社秋季大祭

無茶々園事務所のある狩浜地区では毎年10月第4土曜日に秋祭り（春日神社秋季大祭）が行われます。狩浜には「本浦（ほんうら）」「大狩浜（おおかりはま）」「門之脇（かどのわき）」の三つの集落があり、それぞれが担当する練り（出し物）があります。

- ・本浦：牛鬼（うしおに）
- ・大狩浜：五ッ鹿（いつしか）
- ・門之脇：御船（おふね）

このほかに子どもたちが担う「大神楽（だいかぐら）」「角力練り（すもうねり）」「巫女の舞」なども披露され、子どもから大人まで関わって地域全体で祭りを作り上げていきます。

牛鬼組の活動

私は本浦地区の出身で、現役の「かき手」です。かき手とは牛鬼をかつぐ者のこと（牛鬼や神輿をかつぐことを「かく」といいます）。21歳でこのかき手となり、今年で35歳。途中2年間祭が中止となったため、今年で13年目になります。

牛鬼は頭（かしら）使い一名と、かき手14名で構成されており、こます。そしてフィナーレを飾るのは「宮入り」。3体の神輿が石段を一気に駆け上がる光景は圧巻。歓声と太鼓の音が響き渡り、活気が一段と高まります。

宮入りを終えた後も、牛鬼の頭を持って集落の各戸を祓って回ります。1日中、暴れ回った体は疲労困憊。宿へ戻るのは深夜0時ごろ。起床からおよそ20時間が経っています。宿主に迎え入れられ、静かに盃を交わす。言葉少なに交わされる笑みと頷きの中に、「今年も無事終わったな」という安堵と、次の1年への思いが滲みます。こうして長い1日が静かに幕を閉じ、また新たな祭りへの準備が始まります。

変わりゆく時代の中で

私の父の世代では、本浦地区以外の人が牛鬼をかくことは少なく、昔の名残として牛鬼組の御旗には「本村青年牛鬼組」と記されていますが、今では地区をまたいで牛鬼をかくことも珍しくなくなりました。また、私が始めた頃は独身者が多かったのに対し、最近では既婚者が増え、家族の理解を得ながら準備に励む姿が増えました。わずか15年でも祭りの担い手を取り巻く環境は変わっています。練りの指導や人材の確保が難しくなってきたのは、牛鬼組に限らず他の練りも同様であり、祭の継続そのものが課題になりつつあります。

の総勢15名が「牛鬼組」として活動します。頭使いは牛鬼の動きを操るとともに、牛鬼組の運営を取り仕切る重要な役割で、担当できるのは一生に一度。お盆が明けると前年の頭使いを中心にメンバー選定が行われ、9月末には準備が本格化します。以降は、日曜日を除く毎晩、仕事終わりの19時から深夜まで準備作業に取り組みます。

かご作りと技術の継承

祭の約2週間前、牛鬼組は山へ入り、竹やカブラを採取します。これらは牛鬼の胴体部分である「かご」を作るための材料です。かごは「貝の口」「担い棒」「横棒」などの部品と組み合わせて作られます。

祭の2日前に行われる「かご作り」では、かつて牛鬼をかいていた先輩方（通称・黒足袋クラブ）も加わり、昔ながらの技術が若手に受け継がれていきます。特にかごを補強するために竹を縛る「ヘガシラ」という結び方は熟練の技術が求められます。「あーでもない、こーでもない」と笑い声が飛び交う、年に一度の作業を通じて自然に技術が伝承されていきます。



未来へつないでゆく

私たちが受け継いできたこの伝統を、時代に合わせて形を変えながらも守り続けていくこと。それが、今を生きる私たちの責任だと感じています。

地域の人々が、「いいお祭りやっ たな」と言い続けられるように。そして子供たちがこの地域の誇りを繋いでいけるように。これからも狩浜の「祭」を守り続けていきます。

（川越瑛介）

なかなか話にくい

価格のこと

産地の未来のこと



昨年は米の価格高騰が大きな騒ぎになり、一年経ってもどう落ち着いていくのか見通せない様相です。物価が全体的に上がっていますが、なかでも農産物や食品は価格の上昇が大きく、みなさんの生活も、そして私たちのような農産物の生産地にとっても変化の大きい時代になったことを実感します。

みかんの値上げ

みかんをはじめとした商品の価格も値上げする方向に改定する機会が多くなり、お付き合いたいだいてきた皆さんにこれまで通りの価格で提案できないことは心苦しくも感じています。

地元の青果市場では高価格でみかんが取引されるようになり、農家の販売行動もJAを含めた既存の集荷団体から離れて市場や個人販売へと動きが加速したようです。無茶々園も農家団体であると同時に集荷団体であるとも言え、他人ごとではありません。価格上昇は生産農家にとっては経済的に良いことでもあるのですが、産地のあり方を改めて考え直すしなければならぬ時代でもあります。

消費者物価指数を見ると、みかんの価格はバブル経済が終わる1990年頃から30年近くほぼ横ばいで豊作不作による上下だけが繰り返さ

れていました。2015年頃から緩やかに上昇がはじまり、2022年から上昇幅が拡大。2024年には急上昇して今に至っています。

売り買いという面ではどうしても安価に越したことがないわけで、正面から価格の話をするのはあまり気持ちの良くないものではないかもしれませんが、この機会にみかん産地から見てこの数年間に進んできた変化についてざっとまとめてみたいと思います。

5つの変化

- ①インフレ傾向で農業資材や送料などが値上がりしている
- ②最低賃金の改定によって人件費も上がっている
- ③みかん栽培や果樹産業には構造的な問題がある
- ④生産者個人が取り組める販売チャネルが増えた
- ⑤環境保全型の農業をどう地域で取り組むのか

① 資材等の高騰

まずはインフレ傾向の影響です。みかん栽培でも肥料、農薬といった資材から燃料、機械類などの値上がりが続いて生産コストが上がっています。例えば有機栽培でも認められるマシン油という農薬は石油価格の影響を受けやすく、10年前にくらべると2倍ほどの価格になりました。また、傾斜地での運搬に欠かせないモノレールの設置費や改修費も跳ね上がって農家の悩みの種となっています。言うまでもなく送料やダンボールなど出荷に掛かる費用も上昇しています。

② 人件費も上がって

人件費の面では、外国人の技能実習生が入る農家もあるほか、収穫などの繁忙期には採り手の雇用も行っています。政策的に最低賃金が改定され続けていることもあり、みかん栽培でも毎年人件費が上がっています。裏を返せば、畑の現場では最低賃金あたりでみんな頑張っているとも言えるのですが・・・。

③ 構造的な問題が

そして、こういった表層的な価格上昇の要因に加え、みかんや果樹に関してはより根本的な課題が背景にあります。

全国の農家数を調べた統計では農家の数はずっと減り続けており、なかでも果樹農家の減り方はかなり激しいようです。みかんやリンゴは戦後の農業改革で全国的に産地化が進められ、一気に生産量が増えた結果として安価で手軽なイメージの果物となりました。しかし数十年をかけて農村からの人口流失と生産者の減少が進み続けたいま、温州みかんの生産量は1970年代のピーク時に比べると5分の1以下にまで減少しています。

基盤整備が困難な傾斜地の畑が多く、機械を活用できる作業が少ないのが果樹栽培の特性でもあります。米なら来年作付を増やすことも容易ですが、果樹は植えてから収穫までに何年も要するため、一旦下がった生産量はそう簡単には回復できません。長期育成型であることが目の前の需給の調整をより難しくしています。

④ 販売の変化

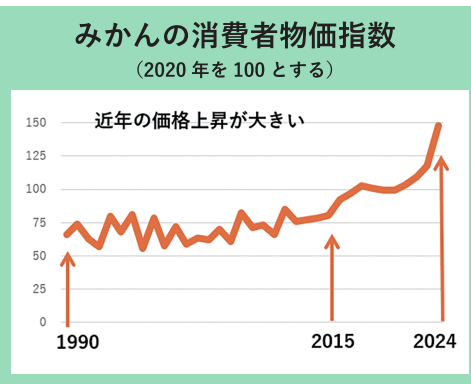
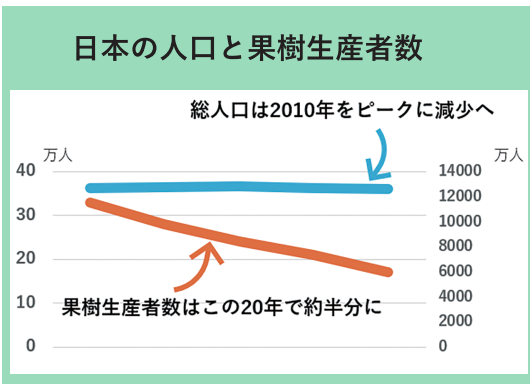
生産だけではなく販売面でも環境が変わり、最近では農家にとっての選択肢が広がっています。以前は集荷団体との専属的な関係性が強かったのですが、独占禁止法等の指導もあってかなり緩やかになり、農家も自由な販売活動が行いやすくなり



- ① 明浜の段々畑の風景。みかん畑と住宅が近い。また傾斜が急であり、みかんの運搬にモノレールが必須です。
- ② 家族経営が主であったみかん農業は今では実習生やアルバイトの雇用も多くなっています。
- ③ 2023年に肥料の工場を取得。少しでも生産コスト削減できるように努めています。

④ 段々畑には味に関わる良い点がある一方で幅が狭く、機械を基本的に使用できないなどといった作業性が悪い点もあります。また、「さご畑」と言われる石垣を築いていない急傾斜にもみかんが植わっているので立つのも一苦労です。

⑤ 夏場の草刈りは重労働。短時間でも長靴に汗がたまります。一番暑い時間帯を避けて朝、夕方に作業する農家が多いです。



ました。SNS等のツールによって発信や販売活動には誰でも取り組めるようになり、ふるさと納税の盛況もその後押しに。結果として単純に市場で価格が決まるのではなく幅広い価格決定が行われるようになり、生産量が少なければ少ないほど青果市場でも競争的な仕入が行われるようになってきました。

⑤ 無茶々園の取り組み

さて、こういった環境のなか、有機栽培や特別栽培（基準から農薬・化学肥料を50%以上削減した栽培）に取り組んでいる農家のグループである私たちはどう考えていくべきでしょうか。環境や健康への配慮を優先していますが、一般的な栽培に比べて病気や虫害による生産リスクが高く、草刈りなどの作業負担もより大きい栽培方法です。最近では温暖化による夏の長期化がこの取り組みにくさを益々助長しています。

持続可能性という意味でも、栽培を続けていく後押しになるような環境作りが大事です。来年、再来年といったスケールではなく、家族経営型であれば後継者に託すことができるかどうか、またゼロからのスタートである新規参入が継続して成立するだけの生業になるかどうか、より長い期間をイメージして価格のことも考えていきたいものです。価格を決める最大の要因であるみかんの生産量を回復するためには、もしかすると、生産方式や経営手法に大きな

天歩が少し変わりました

今号から様式を変更しました。思い切って約20年振りに縦書きにしてみました。少し読みやすくなったでしょうが、これからもよろしく願っています。

ご意見お待ちしております

天歩は無茶々園の日常、生産者の今、お知らせを発信するものでもあり、みなさんと無茶々園がつながれるものであると考えています。天歩に関することなどなんでもかまいませんのでご意見やご感想お待ちしております。QRコードからお送りいただけます。

